

研究レポート

3

地方の父親の子育て環境と ワークライフバランス



ベネッセ教育総合研究所

田村 徳子

●調査対象について

「乳幼児の父親についての調査」は、2009年と2014年で首都圏だけではなく、地方に住む父親にも調査を実施した。調査地域は、祖父母世代も含めた家族とのかかわりをみるため、祖父母世代との三世代同居率が高い秋田県、岩手県、山形県、福島県、新潟県、富山県、福井県、鳥取県、島根県、佐賀県の10県を対象とした。ただし、2014年は、東日本大震災による人口移動の影響を配慮し、岩手県、福島県を除いて調査を実施している。

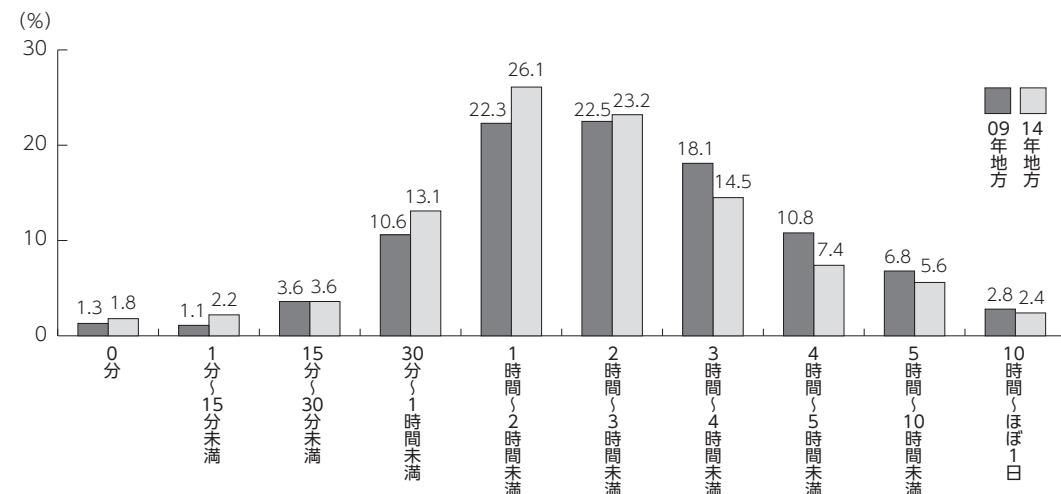
祖父母世代での三世代同居率の高い地方における父親に焦点をあてた調査は少ない。また、内閣府の「少子化社会対策大綱」(平成27年3月)には、段階に応じた支援として子育てについて三世代同居・近居の促進があげられている。この章では、地方で生活する父親の子どもとのかかわり、家族とのかかわり、ワークライフバランスをみていき、また三世代同居世帯と非同居世帯の現状を通して、子育て支援の可能性と課題をみていきたい。

表3-1-1 調査対象

	サンプル数	内、三世代同居世帯/非同居世帯
09年調査	529人	152人/377人
14年調査	551人	149人/402人

※ともに父親の年齢は45歳以下に統一。

図3-1-1 平日に子どもと一緒に過ごす時間（経年比較）



1. 子どもとのかかわり

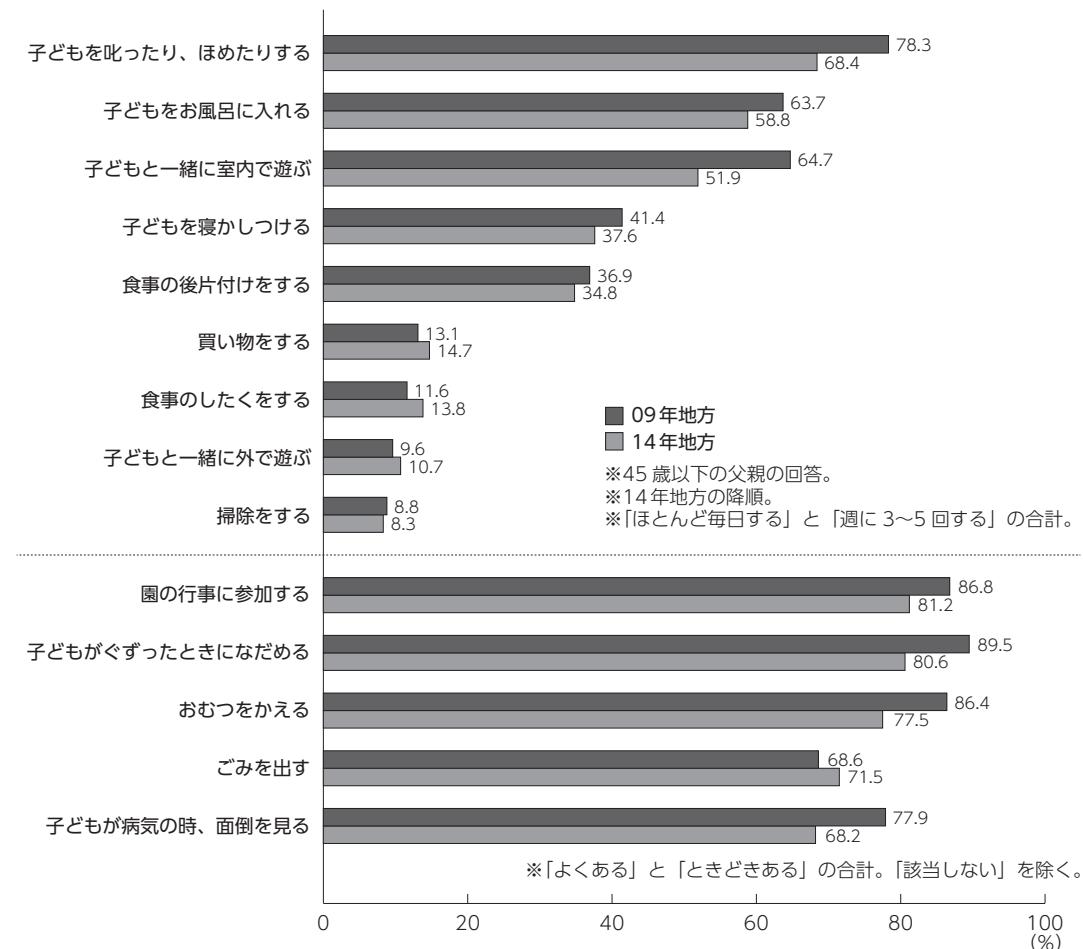
●地方の父親が平日に子どもと過ごす時間と子育てに関わる頻度は、減っている

地方の父親が平日に子どもと一緒に過ごす時間はどう変化しただろうか。図3-1-1をみると、「0分」から「1時間～2時間未満」までを合わせた比率は2009年が38.9%であるのに対しても2014年が46.8%と7.9ポイント増えていた。平日に子どもと過ごす時間は2時間未満が増えており、父親が子どもと過ごす時間は減ったことがわかった。

地方の父親の家事・育児を行う頻度はどう変化したか。図3-1-2をみると、「子どもを叱つ

たり、ほめたりする」は2009年が78.3%で2014年が68.4%と9.9ポイント減り、「子どもと一緒に室内で遊ぶ」は2009年が64.7%で2014年が51.9%と12.8ポイント減った。また、「子どもがぐずったときになだめる」は2009年89.5%で2014年80.6%と8.9ポイント減り、「おむつをかえる」は2009年が86.4%で2014年が77.5%と8.9ポイント減り、「子どもが病気の時、面倒を見る」は2009年が77.9%で2014年が68.2%と9.7ポイント減った。地方の父親が家事を行う頻度はあまり変わらなかつたが、育児を行う頻度が減っていた。

図3-1-2 現在、父親がかかわっている家事・育児（経年比較）



2. 家族とのかかわり

●妻の就業率が高まり、妻の経済的な存在感が高くなっている

次に地方の父親の家族との関係の変化をみよう。妻の就業状況を示す表3-2-1をみると、「正社員」は2009年が21.4%で2014年が33.9%と12.5ポイント増えた。有職合計をみても、2009年が52.4%、2014年が64.7%と12.3ポイント増えた。妻の就業率がこの5年間で増えていることがわかる。なお、首都圏でも有職合計が2009年35.6%、2014年が51.5%

と増加していた。本調査では2009年、2014年ともに首都圏より地方の就業率が高くなっている。

妻の就業率が増えるなか、夫と妻との関係は変化しただろうか。図3-2-1をみると、「自分は妻に必要とされている」は2009年が81.1%で2014年が70.2%と10.9ポイント減り、「妻と自分は、互いに心の支えになっている」は2009年が80.7%で2014年が71.3%と9.4ポイント減った。また、「子どものことについて妻と毎日話している」が6.5ポイント、「子ども以外のことについて妻と毎日話している」

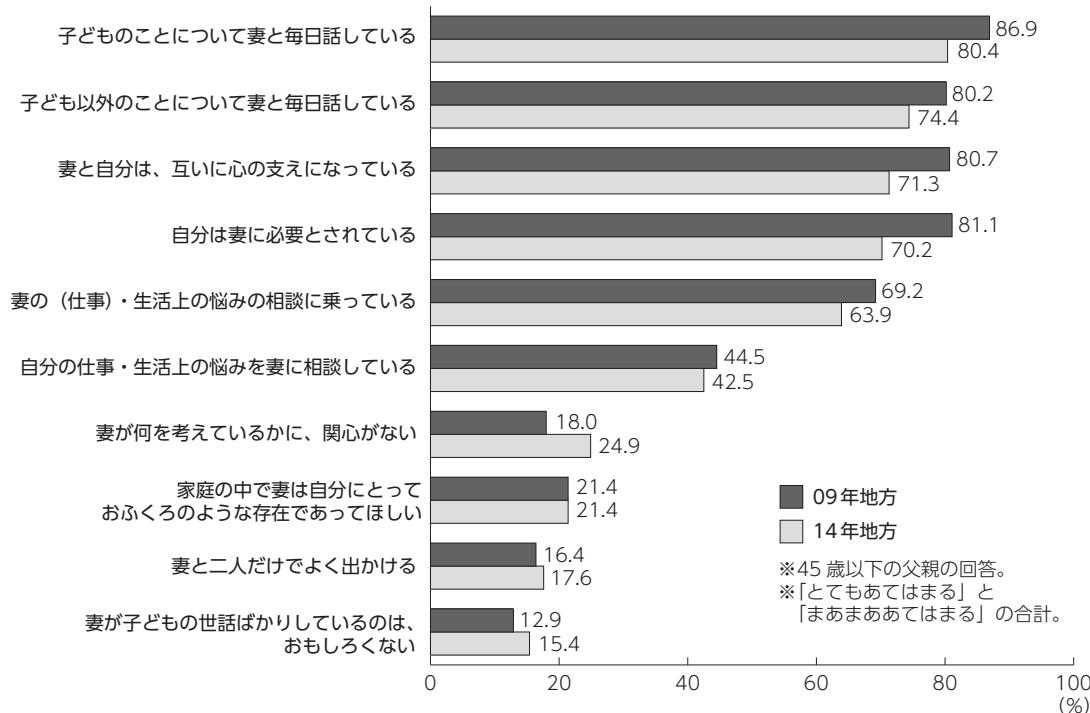
表3-2-1 妻の就業状況（地方・首都圏 経年比較）

(%)

	09年地方	14年地方	09年首都圏	14年首都圏
正社員	21.4	33.9	15.8	30.8
派遣社員	0.2	0.4	1.6	1.3
契約社員	2.6	5.3	1.4	2.5
パートタイム・アルバイト	20.6	19.6	12.5	13.3
自営業・家族従業	5.5	4.2	2.6	2.7
内職・在宅ワーク	2.1	1.3	1.7	0.9
(有職合計)	52.4	64.7	35.6	51.5
無職	47.3	34.8	63.9	48.3
その他	0.4	0.5	0.5	0.3

※45歳以下の父親の回答。

図3-2-1 妻との関係（経年比較）



が5.8ポイント、「妻の（仕事）・生活上の悩みの相談に乗っている」が5.3ポイント減っていた。

地方と首都圏で、妻との関係を比べた（表3-2-2）。「子どものことについて妻と毎日話している」「子ども以外のことについて妻と毎日話している」「妻の（仕事）・生活上の悩みの相談に乗っている」など、会話を頻度に差はみられなかった。一方、「妻と自分は、互いに心の支えになっている」は14年地方が71.3%で14年首都圏が76.1%、「自分は妻に必要とされている」は14年が地方70.2%で14年首都圏が77.9%と、有用感については首都圏に比べて地方がやや低い傾向がみられた。また、14年調査で仕事や家計について、たずねた。「妻が仕事をすることは妻自身にとって必要だ」は14年地方が80.6%、14年首都圏が73.8%、「妻が仕事をすることは家計にとって必要だ」は14年地方が78.8%、14年首都圏が69.0%と、

妻の経済的な存在感については地方で高い傾向がみられた。妻の就業率が増える中、地方の父親は家族のなかで有用感が減り、妻の経済的な存在感が増しているようだ。

●祖父母のサポートは、三世代同居世帯の場合、子どもの預かりや園の送り迎え、家事、経済的な援助など生活全般にわたる。非同居世帯の場合、首都圏とほぼ変わらない

地方において、父親は祖父母にはどのようなサポートをしてもらっているだろうか。はじめに述べたように、この調査の対象は祖父母世代との三世代同居家庭率が高い地域を選んでいる。そこで、三世代同居世帯と非同居世帯における祖父母のサポートの特徴をみたい。なお、三世代同居世帯で同居する祖父母は表3-2-3のとおりである。09年調査でも14年調査でも父親側の祖父母が6～7割台と高くなっている。そこで祖父母のサポートを検討するために、

表3-2-2 妻との関係（地方・首都圏別14年）

	14年 地方	14年 首都圏	(%)
子どものことについて妻と毎日話している	80.4	84.7	
子ども以外のことについて妻と毎日話している	74.4	76.5	
妻と自分は、互いに心の支えになっている	71.3	76.1	
自分は妻に必要とされている	70.2	77.9	
妻の（仕事）・生活上の悩みの相談に乗っている	63.9	64.0	
妻が仕事をすることは妻自身にとって必要だ	80.6	73.8	
妻が仕事をすることは家計にとって必要だ	78.8	69.0	

※45歳以下の父親的回答。

※「とてもあてはある」と「まああてはある」の合計。

※網掛けは、地方と首都圏を比べて、5ポイント以上高いもの。

表3-2-3 三世代同居世帯において同居する祖父母（経年比較）

	09年地方	14年地方	(%)
自分の父	61.2	67.1	
自分の母	75.7	75.8	
配偶者の父	18.4	16.1	
配偶者の母	20.4	20.1	

※45歳以下の父親的回答。

※三世帯同居世帯内（09年地方：152人 14年地方：149人）で誰と同居しているかを算出した。

父方の祖父母との同居に限定して検討してみよう。表3-2-4をみると、三世代（父方）同居世帯の場合、自分の祖父母に対して、「子どもを預かってもらう」「幼稚園や保育園の送り迎えをしてもらう」「家事を手伝ってもらう」「子どもが病気の時に預かってもらう」「子育ての相談に乗ってもらう」「経済的に支援してもらう」など子どもの預かりや園の送り迎え、家事、経済的な援助など全般にわたってサポートをし

てもらっている比率が高かった。また、配偶者の祖父母には「子どものみ泊りにいくのを引き受けてもらう」、「特にない」比率が高かった。

一方、非同居世帯の場合、自分の祖父母に「子どものみ泊りにいくのを引き受けてもらう」「特にない」、配偶者の祖父母に「子どもを預かってもらう」比率が三世代同居世帯に比べて高かった。図示は省くが、非同居世帯の場合の傾向は首都圏の傾向とほぼ変わらなかった。

表3-2-4 祖父母からのサポート（父方同居世帯・三世代非同居世帯別14年地方）

	父方 同居*	三世代 非同居		父方 同居*	三世代 非同居		
あなたの お父様	子どもを預かってもらう	43.8	28.3	配偶者 のお父様	子どもを預かってもらう	20.4	32.7
	幼稚園や保育園の送り迎えをしてもらう	23.8	7.4		幼稚園や保育園の送り迎えをしてもらう	4.1	8.1
	家事（食事作りや掃除洗濯など）を手伝ってもらう	20.0	2.7		家事（食事作りや掃除洗濯など）を手伝ってもらう	3.1	5.5
	子どもが病気の時に預かってもらう	21.0	10.6		子どもが病気の時に預かってもらう	7.1	11.8
	子どものみ泊りにいくのを引き受けてもらう	1.9	10.6		子どものみ泊りにいくのを引き受けてもらう	21.4	13.3
	子育ての相談にのってもらう	15.2	7.7		子育ての相談にのってもらう	14.3	10.4
	経済的に支援してもらう	45.7	25.4		経済的に支援してもらう	19.4	17.3
	その他	3.8	7.1		その他	6.1	6.6
	特にない	14.3	38.3		特にない	37.8	33.8
	わからない	1.0	2.9		わからない	4.1	5.2
あなたの お母様	子どもを預かってもらう	63.2	37.4	配偶者 のお母様	子どもを預かってもらう	27.4	44.4
	幼稚園や保育園の送り迎えをしてもらう	38.6	10.2		幼稚園や保育園の送り迎えをしてもらう	8.0	11.5
	家事（食事作りや掃除洗濯など）を手伝ってもらう	58.8	9.6		家事（食事作りや掃除洗濯など）を手伝ってもらう	5.3	13.6
	子どもが病気の時に預かってもらう	41.2	20.1		子どもが病気の時に預かってもらう	15.0	21.5
	子どものみ泊りにいくのを引き受けてもらう	2.6	13.6		子どものみ泊りにいくのを引き受けてもらう	25.7	17.2
	子育ての相談にのってもらう	31.6	19.0		子育ての相談にのってもらう	23.0	20.3
	経済的に支援してもらう	35.1	23.0		経済的に支援してもらう	17.7	17.4
	その他	7.0	6.7		その他	6.2	5.6
	特にない	8.8	30.5		特にない	34.5	25.9
	わからない	0.0	3.2		わからない	1.8	3.3

* 45歳以下の父親の回答。

* 父方同居は、「あなたのお父様」または「あなたのお母様」との同居の場合に限定。

* 自身または配偶者の父母が「いい」の回答者は集計から除く。

* 線かけは、父方同居世帯と三世代非同居世帯を比べて、5ポイント以上高いもの。

表3-2-5で妻の就業率をみると、非同居世帯は2009年が48.0%、2014年が60.9%であり、三世代同居世帯は2009年が63.2%、2014年が74.5%だった。三世代同居世帯も非同居世帯とともに妻の就業率は高まっているが、三世代同居世帯の妻の就業率は7割以上であり、さまざまな活動のときに祖父母に子どもを預かってもらっていると思われる。

また、表3-2-6で経済的なゆとりをみると、

「ゆとりがある」と「多少ゆとりがある」を合わせた比率は、非同居世帯は2009年が29.2%、2014年が32.8%、三世代同居世帯は2009年が21.7%、2014年が27.5%となっている。2009年から2014年にかけて、経済的にゆとりを感じる傾向が増えている。三世代同居世帯と非同居世帯を比べると三世代同居世帯のほうがゆとりがない状況は変わらず、祖父母世代から経済的なサポートを得る傾向にあると思われる。

表3-2-5 妻の現在の職業（三世代同居世帯・非同居世帯別 経年比較）

(%)

	同居		非同居	
	09年地方	14年地方	09年地方	14年地方
正社員	23.7	40.9	20.4	31.3
派遣社員	0.7	0.0	0.0	0.5
契約社員	3.9	6.7	2.1	4.7
パートタイム・アルバイト	25.0	18.1	18.8	20.1
自営業・家族従業	7.9	8.7	4.5	2.5
内職・在宅ワーク	2.0	0.0	2.1	1.7
(有職合計)	63.2	74.4	48.0	61.0
無職	36.8	24.8	51.5	38.6
その他	0.0	0.7	0.5	0.5

※45歳以下の父親の回答。

表3-2-6 経済的なゆとり（三世代同居世帯・非同居世帯 経年比較）

(%)

	同居		非同居	
	09年地方	14年地方	09年地方	14年地方
あなたのご家庭の生活には経済的にどの程度ゆとりがありますか	ゆとりがある	2.6	2.0	2.9
	多少ゆとりがある	19.1	25.5	26.3
	(ゆとりがある合計)	21.7	27.5	29.2
	あまりゆとりがない	50.0	50.3	47.5
	ゆとりがない	28.3	22.1	23.3

※45歳以下の父親の回答。

3.ワークライフバランス

●三世代同居世帯の場合、自分の趣味や勉強、地域での活動をしている。一方、非同居世帯の場合、地域での活動は減り、自治活動を除き、首都圏とほぼ変わらない

地方の父親のワークライフバランスはどのような状況だろうか。父親が仕事に出かける時間帯と帰宅する時間帯をみよう。表3-3-1をみると、仕事に出かける時間は「午前6時より前」と「6時台」を合わせて2009年は9.3%だったのが、2014年は15.9%と6.3ポイント増えている。また、帰る時間は「17時より前」か

ら「19時台」までと合わせて、2009年は70.1%、2014年は68.1%とほぼ差はみられなかった。通勤時間も差はみられなかった。

『第5回幼児の生活アンケート』(2015、ベネッセ教育総合研究所)によれば、子どもの起床時刻は、6時半頃から7時頃が約半数を占め、就寝時刻は21時頃から21時半頃が約半数を占めていた。

地方の父親は、子どもが起きて食事や遊びなどの活動をしている時間に家にいることがやや減っている。そのことが、子どもと過ごす時間の減少や子どもとかかわる頻度と関係している可能性が考えられる。地方の父親は、自分の趣味、勉強、地域活動などにどれくらい取り組ん

表3-3-1 父親の仕事に出かける時間帯、帰宅する時間帯、平均通勤時間（経年比較）

		(%)	
		09年地方	14年地方
あなたの仕事に出かける時間	午前6時より前	3.3	4.9
	6時台	6.0	11.0
	7時台	53.5	50.0
	8時台	29.7	27.3
	9時台	5.0	2.7
	10時～11時台	1.0	1.1
	12時以降	1.5	2.9
あなたの帰宅時間	17時より前	4.2	3.5
	17時台	14.7	13.9
	18時台	26.3	28.8
	19時台	24.9	22.0
	20時台	14.7	16.5
	21時台	7.1	8.1
	22時台	4.8	2.9
	23時台	1.9	0.7
	24時以降	1.4	3.7
	あなたの平均通勤時間（分）	20.0	22.4

※45歳以下の父親の回答。

※無職、その他を除く。平均通勤時間では、さらに無答不明も除去して算出。

表3-3-2 趣味や勉強、地域での活動（三世代同居世帯・非同居世帯別 経年比較）

	同居		非同居	
	09年地方	14年地方	09年地方	14年地方
自分のための趣味	71.1	71.2	70.0	57.7
園・小学校のおやじの会、父親向けのサークルなど	31.6	33.6	26.2	17.9
園・小学校のPTAなど	37.5	37.6	25.7	19.1
自治活動（町内会、管理組合等）や地域の行事、ボランティアなど	43.5	43.6	34.4	32.1
大学・大学院・専門学校などでの勉強、資格のための勉強など	19.7	24.2	21.8	15.4

※45歳以下の父親の回答。※「熱心に取り組んでいる」と「ほどほどに取り組んでいる」の合計。

※網掛けは、2009年と2014年を比べて、5ポイント以上高いもの。

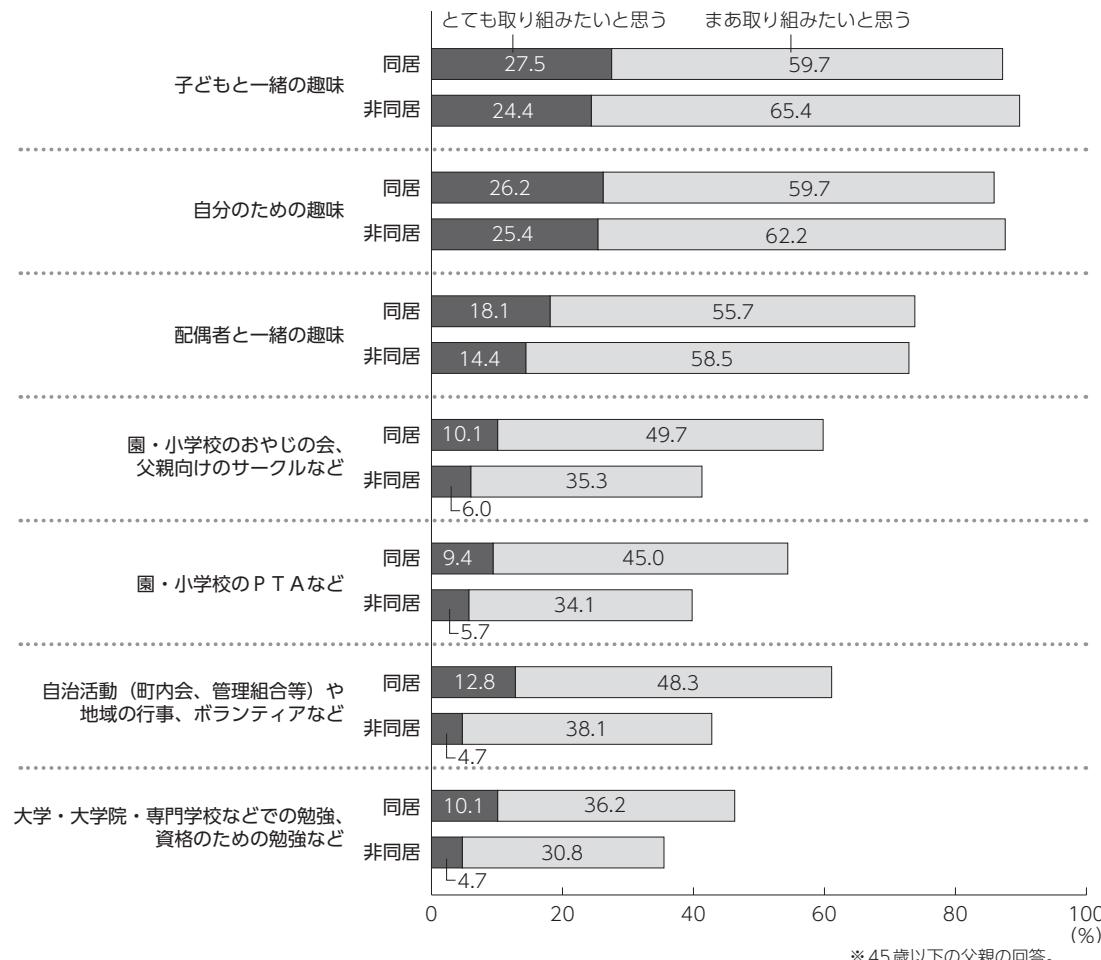
でいるだろうか。表3-3-2で、2014年での三世代同居世帯の父親と非同居世帯の父親の現状を見ていこう。「自分のための趣味」をしているのは三世代同居世帯では71.1%であるのに対して非同居世帯では57.7%だった。また、「園・小学校のおやじの会、父親向けのサークルなど」は三世代同居では33.6%、非同居世帯では17.9%、「自治活動や地域の行事、ボランティアなど」は三世代同居では43.6%、非同居世帯では32.1%、さらに「大学・大学院・専門学校などでの勉強、資格のための勉強など」は三世代同居世帯では24.2%、非同居世帯では15.4%と、いずれも三世代同居世帯の父親の活動の比率が高い傾向がみられた。

では、父親による自分の趣味、勉強、地域活動などの取り組みはどう変化しただろうか。三世代同居世帯の場合、2009年と2014年で比

率はほぼ変わらず、「大学・大学院・専門学校などでの勉強、資格のための勉強など」がやや増える傾向がみられた。一方、非同居世帯の場合、「自分のための活動」は2009年が70.0%で2014年が57.7%と12.3ポイント減った。同様に「園・小学校のおやじの会、父親向けのサークルなど」「園・小学校のPTAなど」「大学・大学院・専門学校などでの勉強、資格のための勉強など」が5ポイント以上減った。図表は省くが地方の非同居世帯と首都圏の傾向を比べると、2014年では、自治活動や地域の行事、ボランティアなどを除いて、非同居家庭と首都圏は同様の比率だった。

今後取り組みたい活動についてたずねたところ（図3-3-1）、三世代同居世帯でも非同居世帯でも、「子どもと一緒に趣味」や「自分のための趣味」は「とても取り組みたいと思う」という

図3-3-1 今後取り組みたい活動（三世代同居世帯・非同居世帯別 14年地方）



と「まあ取り組みたいと思う」を合わせて8割以上だった。一方、「園・小学校のおやじの会、父親向けのサークルなど」に取り組みたいと回答する比率は三世帯同居世帯が59.8%で非同居世帯が41.3%と18.5ポイントの差がみられ、「園・小学校のPTAなど」には三世帯同居世帯が54.4%で非同居世帯が39.8%と14.6ポイントの差がみられた。また、「自治活動や地域の行事、ボランティアなど」には三世帯同居世帯が61.1%で非同居世帯が42.8%と18.3ポイントの差がみられ、「大学・大学院・専門学校などでの勉強、資格のための勉強など」には三世帯同居世帯が46.3%で非同居世帯が35.5%と10.8ポイントの差がみられ、三世代同居世帯の父親のほうが非同居世帯の父親より取り組みたい比率が高かった。三世代同居世帯の父親の場合、自分の趣味や地域での活動を現在行っており、今後も取り組みたいと考えている。これは、三世代同居世帯の場合、父親が祖父母のサポートを受けられることにより、自分の趣味や地域での活動に時間を割くことができるという可能性が考えられる。一方、非同居世帯の父親の場合、取り組みたい活動は自分や妻、子どもとの活動にとどまる傾向がうかがえる。

4.まとめ

●地方において、父親自身がなりたい父親像を考え、活躍する場を考える必要がある
以上、地方での乳幼児を持つ父親についてみてきた。ポイントは以下のとおりである。

1. 地方でも、平日に子どもと過ごす時間と子育てに関わる頻度が減っている。
2. 家族との関係では、妻の就業率が高まり、妻の経済的な存在が増している。
3. 祖父母のサポートは、三世代同居世帯の場合、子どもの預かりや園の送り迎え、家事、経済的な援助など生活全般にわたる。非同居世帯の場合、首都圏とほぼ変わらない。

4. 父親のワークライフバランスは、三世代同居世帯の場合、自分の趣味や勉強、地域での活動をしている。非同居世帯の場合、地域での活動は減り、自治活動を除いて、首都圏とほぼ変わらなくなっている。

首都圏の分析では、父親の長時間労働が子育てや家族とのかかわりに影響を及ぼすこと、イクメンという言葉が流行する中で自分らしい父親像を模索することの必要性が浮かびあがった。（『第3回 乳幼児の父親についての調査』速報版参照。）

今回、地方の分析では、この5年間に妻の就業率が高まり、父親自身も仕事に出かける時間が早まり、子どもと過ごす時間と子育てに関わる頻度が減る傾向にあった。地方で父親の68.2%が19時台まで帰ることができているという現状は、親子のかかわりを考える場合、維持したい数値ではないだろうか。

また、三世代同居世帯で祖父母のサポートを全般にわたって受けられる場合、父親は自分の趣味や勉強、地域での活動まで行うことができているが、非同居世帯の場合、そこまで余力がなく、首都圏と同様の比率だった。三世代同居世帯でも、祖父母世代が健康で子育て世代を経済的や精神的にサポートできる良好状態にある場合、恵まれた子育て環境を築くことができるだろう。しかし、いずれかの要素が崩れた場合、子育て世代に経済的な余裕がなくなり、非同居世帯にみられるように時間的な余裕もなくなることが予想され、子育てに余裕のない環境に一変するリスクも否定できない。それを考慮すると、地域による子育ての社会的な支援の取り組みを引き継ぎ行うことが必要だろう。

最後に、経済的な状況や共働きへの流れなど、子育て世帯を取り巻く環境は地方でも厳しい。さらに地方の父親が有用感を低下させていることが懸念される。変化する環境の中で、自分としてなりたい父親像を考え、自分が活躍できる場を考える必要があると思われる。